

# 仮設装置を活用した街路の空間特性と賑わい創出の条件

## －香港・屋台街におけるケーススタディより－

内田 晃（北九州市立大学都市政策研究所 准教授）

### I. はじめに

#### 1. 研究の背景

北九州市では、昭和 63 年に策定した「北九州市ルネッサンス構想」に基づき、「都心」と位置づけた小倉地区において、マイタウンマイリバー整備事業や小倉駅前東地区再開発事業など様々な事業を推進してきた。また、門司港レトロ地区をはじめとする観光拠点整備によって観光都市としてのポテンシャルも急速な高まりを見せている。近年は、市の主要施策の一つとして「ビジターズ・インダストリー」をあげており、都市活力をさらに維持・増進していくためには、一層の集客力の向上が不可欠であると言える。

一方で、小倉や黒崎などの中心市街地では「まちで楽しく時間を過ごす」には魅力が乏しいのも現実である。これらの地域で時間消費型の集客を促すためには、既存の集客施設を活かしつつ、文化・食・ショッピング・風景・環境・レクリエーション・交通など、新たな要素を付加することで、既存の要素の魅力を高めていく必要がある。その一つの例として黒崎中心市街地では、屋台を活用したナイトバザールの開催によって賑わいを創出しようという地元組織からの提案もあがっている。

このような仮設的な屋台については、道路空間の新たな使われ方として近年注目が集まっている。わが国の道路空間はこれまで、自動車が走行しやすい空間を是として通行機能重視に偏向してきたが、歩行者の安全確保やバリアフリーの観点とともに、道路空間自体に魅力を取り戻そうとする機運が高まっている。道路空間において新たな利用価値を見出し、都市空間として再構築することは、衰退傾向が著しい中心市街地の再活性化手法としても認識されつつあり、屋台やオープンカフェ等の仮設的な空間はその要素として価値が見直されている。

仮設空間が日常的に都市構成要素として溶け込み、その都市の魅力向上に大きく寄与している代表的な事例として、福岡市の屋台をはじめとしてアジア各国でみられる屋台・露店があげられる。世界遺産・ボロブドール遺跡の玄関口であるインドネシアの古都ジョグジャカルタ市中心部のマリオボロストリートでは、食料品から日用品に至るまで様々な業種、1000 軒以上の屋台・露店が終日営業する魅力あるメインストリートとして多くの市民や観光客に親しまれている（写真 1）。韓国・ソウル市の若者に人気の賑わいエリアである弘大（ホンデ）地区や梨大（イデ）地区では、メインストリートのみならず細街路に至るまで多くの飲食系の屋台が軒を並べており、若い女性客が気軽に入れる屋台として定着しており、エリアの賑わい創出に大きく貢献している（写真 2）。また、昨年度の研究プロジェクト<sup>1)</sup>ではシンガポールのメインストリートであるオーチャード通りとバンコクの本メインストリートであるスクンビット通りにおいて調査を行い、ベンチなどの休憩施設や開

放的な商業空間などとともに、露店や屋台などの仮設空間が都市の賑わいに大きく寄与する要素であることを明らかにした。



写真1 露店の例(ジョグジャカルタ)



写真2 屋台の例(ソウル)

## 2. 研究の目的

市民の生活に密着し、生き生きとした賑わいを支えている屋台や露店が立ち並ぶ街路には、人と人のコミュニケーションを誘発する生活空間としての質が備わっており、そこからは都市固有の活力を感じ取ることができる。また、それらが生み出す街路空間や景観、また可変性を持つ空間からは、賑わいを生み出すための有益な知見を得ることができる。また、日常的には通行や休憩などの一意的な機能しか持たない公共空間としての街路だが、屋台や露店による重層利用によって都市に新たなサイクルを生み出し、様々な顔を持つ魅力ある空間を創り出す手段となり得る。

このような特性を持つ屋台・露店が創り出す賑わいある空間は、都市の重要な構成要素として位置づけることができる。そこで本研究では、まず街路を構成する空間要素や沿道の店舗の業種構成・分布について分析することで、街路全体の空間構成と機能・役割などの特性を把握する。さらに街路利用者の滞留行動を調査し、その種類・分布特性を整理することで、滞留行動と滞留密度の関係性を明らかにする。以上の分析から、仮装置としての屋台や露店が、賑わい創出に寄与するための諸条件を明らかにした上で、北九州市の中心市街地において集客型まちづくりを展開していく上での課題や方策について、仮設空間を活用する観点から提言することを目的とする。

## 3. 研究の対象

### (1) 香港の都市構造の特徴

本研究では、香港のテンプルストリートを対象地とした。香港は中華人民共和国の特別行政区の一つであり、人口約 690 万人（2007 年統計）のアジア屈指の大都市である。1842 年の南京条約によって清からイギリスに割譲され、1997 年 7 月に中華人民共和国へ返還されるまでの 1 世紀以上にわたってイギリスの植民地であった。古くから東南アジアにおける交通の要所であり、また、自由貿易港であったことからイギリスの植民地時代より金融や物流の要所として栄えた。

香港の都市構造は「街市」<sup>(1)</sup>と呼ばれる市場を中心とした街区が開発の軸に沿って市街地を構成している。しかし、地理的条件により、九龍半島と香港島でその構造は異なっている。九龍半島では、人々が住む街区のほとんどが街市を中心に構成されている。各街区はグリッドパターンで構成されており、南北の軸に沿って連続で構成されている。一方で、香港島は北側が狭いことと、急勾配な山地が市街地に迫っているという地理的な条件から、街区が東西軸に構成されている。

香港の街路空間の特徴として屋台・露店がある。図1に香港の屋台街の位置を示す。屋台・露店は地元の人々の生活に密着したものであり、その土地の活気を感じさせてくれる場所である。しかし、都市化が進むにつれて、衛生問題や地域の再開発の問題から屋台街が次第に姿を消していつている。ビル内の衛生的なカフェテリア風の食堂や、ファーストフード店が屋台に取って代わっているケースも見られる。

## (2) テンプルストリートの概要

本研究では、数ある香港の屋台街の中から香港最大の規模を持つテンプルストリートを対象地として抽出した。テンプルストリートは、香港の九龍半島の Nathan Road の西部を南北に走る全長約 800m の街路である (図1)。この通りは Reclamation Street とともに油麻地地区の市場空間の軸をなしており、互いに商品構成を補完しながら、地元住人の衣食を支えている。朝から夕方までは Reclamation Street の果物や野菜市場が賑わい、その後、夕方から深夜にかけてはテンプルストリートのナイトマーケットにおいて衣服や雑貨などの露店が並ぶことから、日用品の全てをこのエリアで揃えることができる。

また、南北に伸びる通りの途中には通り名の由来となる天后廟という寺院が位置しており、香港の他の屋台・露店街と比べて屋台・露店の形態・業種が多種多様である。香港でも数少なくなった大牌槽 (ダイパイトン)<sup>(2)</sup> や衣類、占いなどの様々な露店が立ち並び、地元の住人のみならず多くの観光客が訪れる賑わいあふれる街路である。

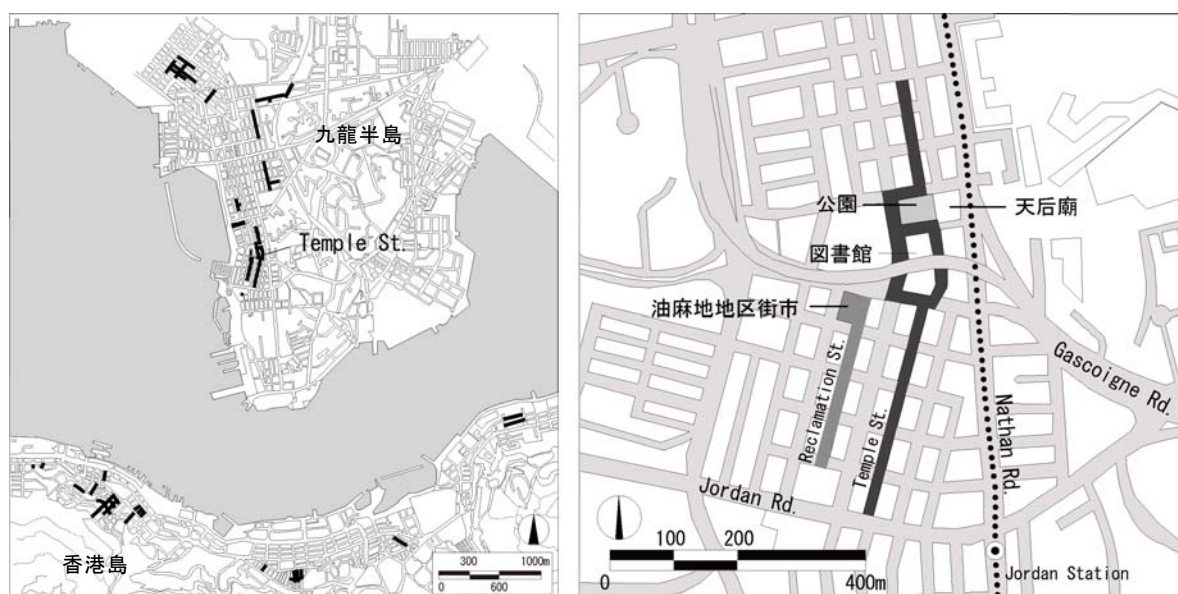


図1 香港の屋台街の位置とテンプルストリートの位置

## II. 街路の空間特性

### 1. 街路の空間構成と使われ方

通り名の由来となっている天后廟という寺院と地元の住人に利用されている図書館が全長約 800 mのテンプルストリートのほぼ中央に立地している。この寺院と図書館を境にして、テンプルストリートは大きく2つの街路タイプに分類することができる。図書館より南側及び寺院より北側は10階建てのショップハウスに囲まれた閉塞感のある街路タイプ（写真3）で、図書館・公園周りは開放感のある街路タイプ（写真4）となっている。



写真3 ショップハウスに囲まれた街区



写真4 公園周りの開放感のある街区

また、屋台・露店が出店準備を始める午後3時頃までの街路空間は、バス・タクシーの駐車スペースや、沿道の店舗のための搬入車両の駐車スペースとして機能している。歩道は Nathan Road 沿いの大型商業施設や Reclamation Street の朝市から帰る地元の買い物客が通り抜ける空間として使用されている。このように日中は主に地元住民のために利用されている。

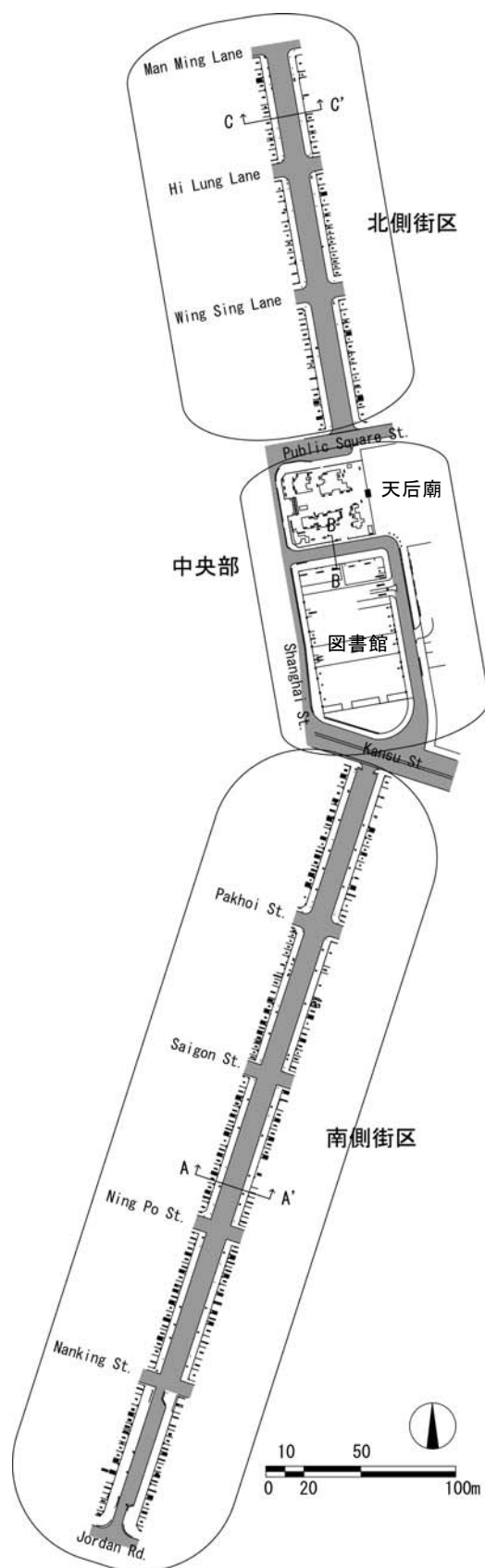


図2 テンプルストリートの構成

## 2. 街路の断面構成

テンプルストリートは前述したように街路のタイプとして大きく2つのタイプに分けることができる。ここでは、南側街区、中央部、北側街区それぞれについて代表的な街区（図2）を選び、その断面図を作成し、街路空間構成を把握する。

### (1) 南側街区の断面

南側5街区は街路の空間構成がいずれも似ている。10階建ての高層ショップハウスが通りの両側に連続して立ち並んでいる。1階は主に店舗となっており、飲食店が多く見られる。日中は、前述したように道路はタクシーの駐車スペースとして利用され、歩道はReclamation Streetの朝市やNathan Road沿いの大型商業施設から帰る買い物客に利用されている。

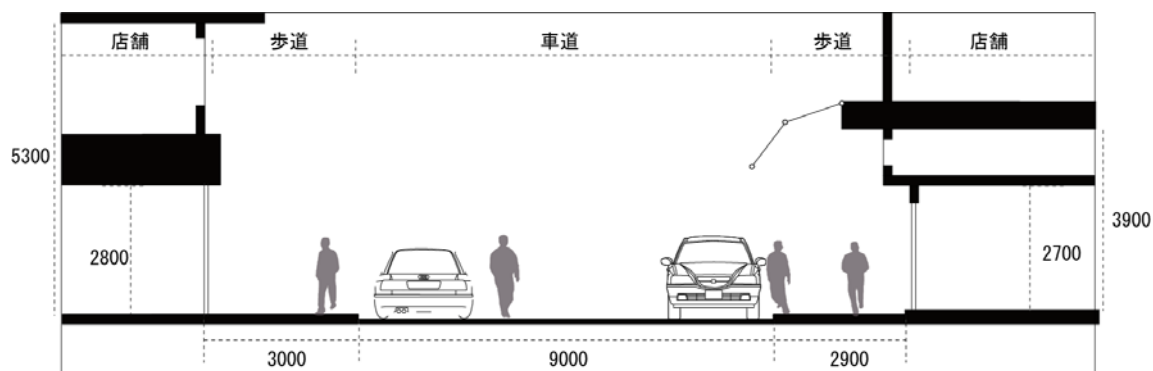


図3 A-A' 断面図

### (2) 中央部の断面構成

中央部の図書館・公園周りは南街区と異なり、図書館以外に周りに高層の建物が少ないため、街路のどちらかは開けた空間となっている。図書館入口は1箇所のみで、歩道は通行機能しか持ち合わせておらず、日中は人が行き来するためだけの機能を果たしている。

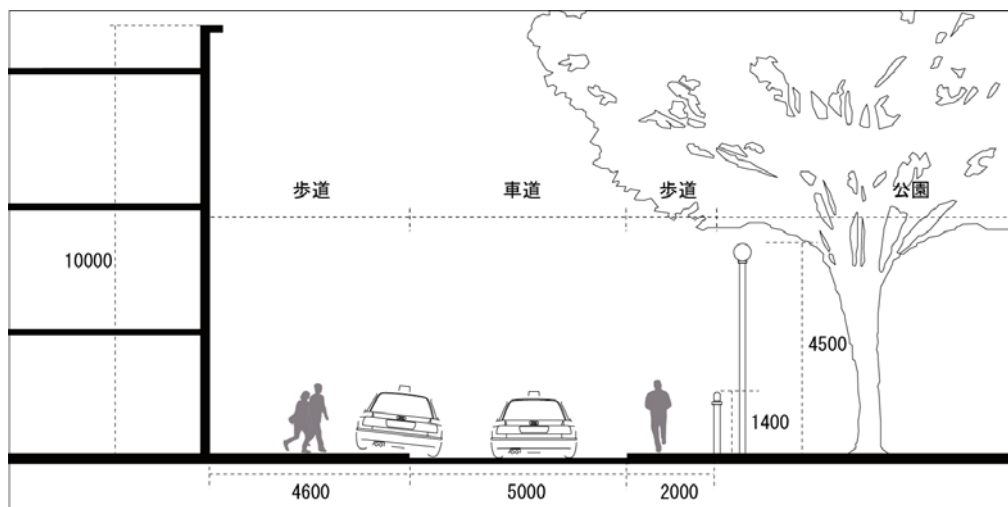


図4 B-B' 断面図

### (3)北側街区の断面

北側3街区は南側街区と街路空間構成が似ている。街路の両脇に10階建ての高層のショップハウスが立ち並び、日中はバスやトラックなどの比較的大型車が駐車スペースとして利用されている。

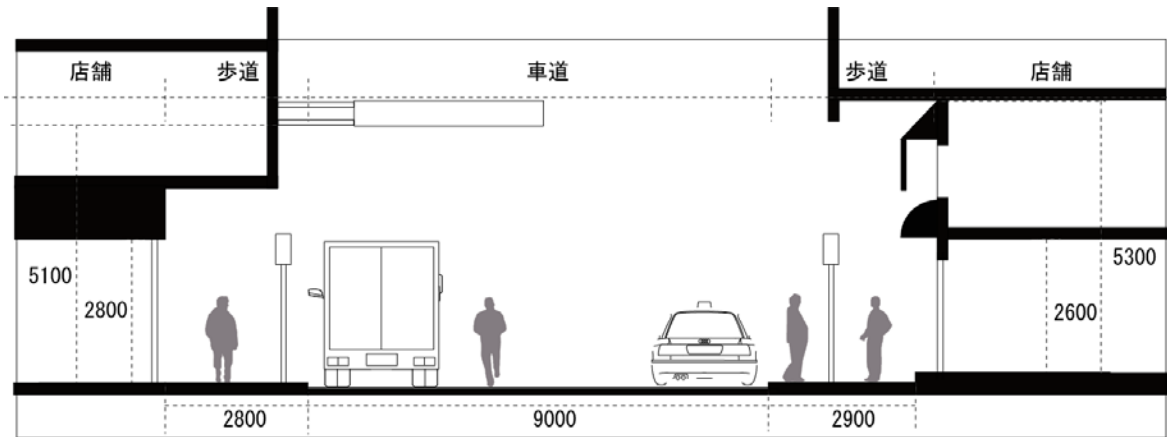


図5 C-C' 断面図

### 3. 沿道の店舗用途

沿道は10階建て前後の高層建物が多く、一階が商業店舗、二階以上が住居となっている。店舗は全体で179あり、その中でも飲食店が44店舗(24.6%)と最も多い。飲食店のほとんどは地元住民が日常的に利用する店舗が多いのが特徴である。全体に満遍なく立地しており、各街区に必ず3店舗以上存在し、中でも北側街区に多く立地している。一方で生鮮食品を扱う店舗が全くないのが、日本の商店街とは異なる特性であると言える。

物販店舗は、アクセサリが23店舗(12.8%)と最も多く、次いで衣料品の21店舗(11.7%)と続く。いずれもいわゆるブランド品ではなく、比較的低廉な商品の品揃えが多いため利用客のほとんどは地元住民である。これらは南側街区に集中して立地している。

マージャンやカラオケといった娯楽系の店舗が立地しているのも特徴で、これらの店舗は主に北側街区にまとまって見られる。多くは屋台・露店が出る夕方の時間帯に店舗を開業し始め、深夜まで営業を続けており、飲食店とともに夜の賑わいに貢献する役割を担っている。

また、屋台・露店の収納スペースのみに活用されている店舗もあり、屋台・露店の営業者に雇われた建設屋が営業開始前と終了時に屋台・露店の骨組みを収納しに来る光景が見られる。

以上のことから、テンブルストリートは南側街区に地元住人の日用品を主に扱う日常的性質を持ち、北側街区に

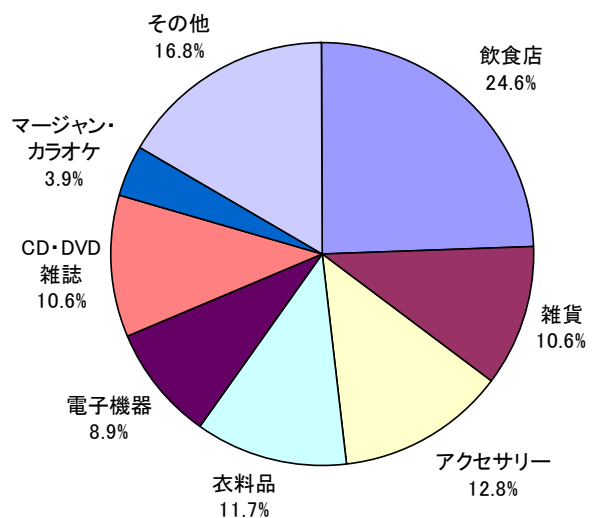


図6 沿道店舗の用途構成

娯楽などの余暇的性質を持っており、全体を見渡すと飲食店を核として地元住民に密着した通りであると言える。

### Ⅲ. 屋台・露店の立地特性

#### 1. 屋台・露店のタイプ

テンプルストリートの屋台・露店のうち、その形態が分類可能だった452軒について8タイプに分けて整理したものを図7～9に示す。最も多いのはパイプ+シートタイプ(38.3%)で、販売品目は衣類・雑貨・アクセサリなど多種多様である。次いで、北街区販売店タイプと骨董品タイプが続いており、公園北側の露店はほとんどこの2つのいずれかのタイプで構成されている。販売品目は前者が主に骨董品やヒスイなどのアクセサリであるのに対し、後者は衣類・雑貨など多種多様である。その他は、大牌槽・占い・カラオケなど特定の目的のための露店である。香港の他の屋台街と比べるとその形態にバリエーションが見られ、このことが可変性のある多様な空間を創り出していると言える。

立地状況を見ると、南側の5街区は行政から承認を得た合法の露天商であることから、ほぼ「パイプ+シートタイプ」で統一されている。一方で、図書館より北側の露天商は行政から承認を得ていない露店がほとんどで、場所によって様々なタイプが立地しており、両街区を見ると対照的である。

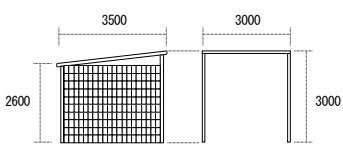

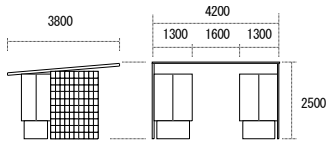

<パイプ+シートタイプ>			
		総数	173 (38.3%)
		販売品目	衣料品、雑貨、CD・DVD、小物、アクセサリ、電子機器、骨董品など
<p>南側街区に多い標準タイプの形態で、行政側から決められた規定の露店タイプである。四隅のパイプの上に天井を乗せ、空間を作り、テーブルが左右に1つずつ配置される。基本的には左右で別々の商品が販売されている。他の露店タイプと異なり、側面壁を利用でき、Tシャツやバッグなどの商品をかけてディスプレイとして利用している。販売品目は衣類、雑貨、アクセサリなど物販系全般。</p>			
<ボックス利用タイプ>			
		総数	18 (4.0%)
		販売品目	衣料品、雑貨、CD・DVD、小物、アクセサリ、電子機器、骨董品など
<p>このタイプはパイプ+シートタイプと同様、南側街区で見られる。ボックスとパイプで上の板を支え、空間を作っている。1つの空間に対してボックスは基本的に2つずつ使用されており、パイプ+シートタイプと同様、左右で異なる商品が販売されており、壁面をディスプレイにする。他の露店タイプと異なり、露店で売られている商品や設営のパイプなどはこのボックスの中に収納されていて、ボックスは常時置かれている。販売品目はパイプ+シートタイプ同様に多種多様である。</p>			

図7 屋台・露店の形態(その1)

<b>&lt;大牌槽タイプ&gt;</b>			
		総数	14 (3.1%)
		販売品目	食事、飲料
<p>このタイプは沿道建物に入居する飲食店の周りに多く見られ、食事をするためのテーブルとイスのみで構成される。移動が容易なため、夕方、通りに露店が立ち並び始めるとともに、徐々に準備される。また、来客数が増えたり、団体が入ったりする場合に臨機応変に対応できる。</p>			
<b>&lt;占いタイプ(3タイプ)&gt;</b>			
		総数	49 (10.8%)
		販売品目	手相占い、人相占い、タロット占い
<p>このタイプは図書館と公園の間でしか見られない占いのための露店である。中にテーブルとイスが1つずつ配置され、そこに客が座りサービスを受ける。横の幅はどれも同じであるが、上部がパラソルのものもある。</p>			
<b>&lt;カラオケタイプ&gt;</b>			
		総数	3 (0.7%)
		販売品目	手相占い、人相占い、タロット占い
<p>このタイプはテンブルストリートにある露店タイプの中で最も大きいタイプで、すべて図書館の横に出店している。横幅は10mもあり、その中の空間でマイクやアンプ、演奏のための椅子や見物客のための観覧席が置かれている。通りすがりの通行人が好きな歌を歌うことができ、毎晩途切れず歌っている客が見られる。すぐ横には占い露店が立ち並んでいるため、この区域だけ他の地域と異質な光景が広がっている。</p>			
<b>&lt;骨董品タイプ&gt;</b>			
		総数	88 (19.5%)
		販売品目	手相占い、人相占い、タロット占い
<p>このタイプはパイプだけで作られた露店で、主に公園周りに多く見られる。露店の横の長さが様々であり、大きな絵画を売るために長く取られているものもあれば、ヒスイなどアクセサリーを売る店では短いものもある。販売品目は骨董品や絵画が多い。他のタイプと違うのは、南側街区の露店と違い横に長く、奥行きがないため、ディスプレイの仕方もテーブルの上と目の前の壁面を利用している点である。</p>			

図8 屋台・露店の形態 (その2)



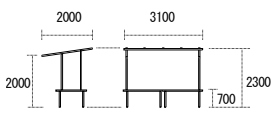

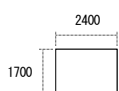

<北街区販売店タイプ>			
		総数	95 (21.0%)
		販売品目	手相占い、人相占い、タロット占い
<p>その名の通り、北側の街区で多く見られる。このタイプは骨董品タイプとパイプ+シートタイプを足し合わせたような特徴を持つ。骨董品タイプと同様に奥行きがあまりなく、横長にできている。さらにパイプ+シートタイプと同様に、側面の壁をディスプレイとして利用している。ディスプレイ空間を多く取り、コンパクトに場所を取らないのが、このタイプの特徴である。販売品目は物販系全般を取り扱っている。</p>			
<シートタイプ>			
		総数	12 (2.7%)
		販売品目	手相占い、人相占い、タロット占い
<p>テンプルストリートの中で最も簡易的なタイプである。図書館の南側近辺に見られ、主にアンティーク風のアクセサリが販売されている。ディスプレイの仕方としては床に布を広げてみせるタイプと、後ろに自分でパイプを立て、そこに布をかぶせてつるすタイプとがある。</p>			

図9 屋台・露店の形態（その3）

## 2. 屋台・露店の業種特性

### (1) 業種構成

全屋台・露店 474 軒を業種別で見ると、図 10 に示すように、雑貨が 177 店舗（37.3%）と最も多く、次いでアクセサリが 110 店舗（23.2%）となっており、この2つで全屋台の6割を占めている。また、その次に多い衣料品の 19.4% を含むと全体の8割を占めることになり、全体として観光客向けの土産物を扱う業種が多い。沿道建物用途で最も多かった飲食店は屋台・露店には全くない。これは香港では路上での「飲食」系屋台の営業が禁じられているためである。以前は飲食系の屋台が存在したが、衛生面の管理やゴミなどの問題から現在では飲食系の屋台は街市の中のみ営業が認められている。なお、大牌槽は沿道建物内の食堂で調理されて出されているため、ここには含んでいない。

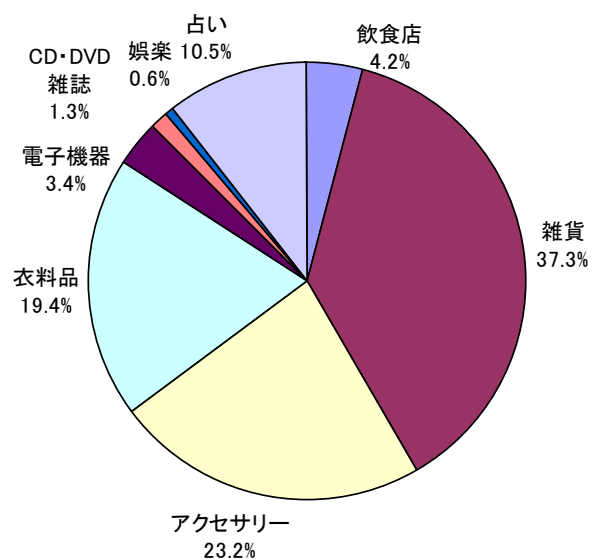


図10 屋台・露店の業種構成

## (2)業種別の特性

屋台・露店を業種別に販売品目や立地状況を見ると、以下のように整理される。

### 1)飲食系屋台(大牌槽)

飲食系の屋台は大牌槽で構成されており、その多くは北街区に分布が見られる。大牌槽は、沿道建物に入っている飲食店が、客が多くなる夜間の時間帯に道路上に簡易式のテーブルとイスを出すため、必然的に飲食店が多いエリアに集中するためである。そのため、北側の街区に大牌槽の90%近くが立地している。なお、大牌槽の配置は主に歩道、もしくは車道でも歩道に近い側に多く見受けられる。販売品目は食事、飲料でアルコールも提供されている。

### 2)雑貨、アクセサリなどの小物系露店

最も多かった雑貨や次いで多かったアクセサリなど、小物を扱う露店は通り全体に満遍なく分布している。販売品目は沿道の店舗と異なり、観光客のための土産用の品物が比較的多く見られ、価格も大型商業施設のもの比べると安い。品目は、香水から骨董品、ライター、コンセントのプラグなど多岐にわたり、豊富にそろっている。また、そのほとんどが車道上で営業を行っており、大牌槽と上手に棲み分けが行われている。

### 3)その他の露店

衣料品を扱う露店も通り全体に満遍なく分布しており、品物は沿道建物の店舗と異なり観光客用の土産物が多い。雑貨やアクセサリとともに、屋台街の主要な業種の一つである。電子機器、CD・DVD・雑誌については、割合としては低いが、その分布は主に沿道店舗の場所とリンクしている。占いを行っている露店は図書館・公園の間の通りに集中している。この周辺には占い以外ではカラオケの露店しか見られず、他の街区とは違う独特のゾーンを形成している。

## (3)屋台・露店の業種からみたテンプルストリートの特性

以上の分析から、テンプルストリートの屋台・露店の特性としては主に以下の4つの観点から整理できる。

### 1)土産品を扱うショッピングストリート

テンプルストリートの屋台・露店は主に物販系の雑貨、アクセサリ、衣料品などの土産物を中心とした機能を持ち、その種類・品数の豊富さと価格の安さにより買い物客や観光客の支持を集め、賑わい創出に寄与している。

### 2)沿道の店舗との補完関係

沿道の建物では飲食店が最も割合が高かった一方で、屋台・露店では雑貨、アクセサリなどの物販系の割合が一番高い。また、物販系も沿道建物では地元住民のための品揃えが充実しており、逆に屋台・露店では観光客向けの品揃えが充実している。この差別化によって、お互いに機能の補完が図られていると言える。

### 3)業種の集積によるゾーン形成

屋台・露店の中には大牌槽のように沿道の店舗と関係して集積しているものもあれば、占い露店のように一部に集中してゾーンを形成しているものも見られた。つまり、テンプルストリート全体で見たときにはそれぞれに大まかなゾーンが形成されている。南側から

飲食系に始まり、その後、図書館まで雑貨・アクセサリなどの物販系露店が続き、公園横の占いゾーンに移っていく。その後は再び、公園周りで小物露店が続き、北側街区に入ると、物販系と飲食系が混在した街区になり、再び飲食系屋台へと移っていく。このように来街者は、街区ごとに少しずつ変化を感じながら通りを歩き、その移り変わりようを楽しむことができる。それがテンプルストリートの魅力の一つになっていると言える。

#### 4) 業種による空間の棲み分け

テンプルストリートは街路の幅員に対して屋台・露店の数が多く、最も多いのは北街区の一番公園寄りの街区で屋台・露店の数が 87 店舗もある。このため、限られた空間を上手く使いこなす工夫や使いこなしが見受けられる。前述したように大牌槽は主に歩道の近くで、また物販系のスペースを必要とするような露店は主に車道を使っている。このことが街路空間の高密度利用につながっている。

### IV. 街路空間での来街者の行動特性

#### 1. 歩行者通行量からみた街路の賑わい

2007 年 12 月の週末（土曜日）と平日（月曜日）の 2 日間、歩行者交通量調査を行った。調査は各街区 1 箇所から街区の断面ラインを決め、そのラインを通過する歩行者の人数をカウントした。調査は両日とも、18:00、20:00、22:00、24:00 の 4 回ずつ行った。2 日間のうち、来街者が多かった週末について、結果を図 11、図 12 に示す。

一番人が多い時間帯は物販系、飲食系、占い系の屋台・露店が徐々に揃い出す 20 時台である。また、18、20、22 時の時間帯は北街区では南向きが、南街区では北向きが、それぞれ交通量が多く、全体としてテンプルストリートの中央部である図書館・公園方向に人が流れていく傾向にある。これはテンプルストリートの両サイド近辺に地下鉄駅があるため、来街者が駅を出て通りの端の方から図書館・公園方向へと向かっていることと推測できる。逆に、24 時台はこの流れが真逆になっており、来街者が駅方面へと帰っていく様子が見られる。

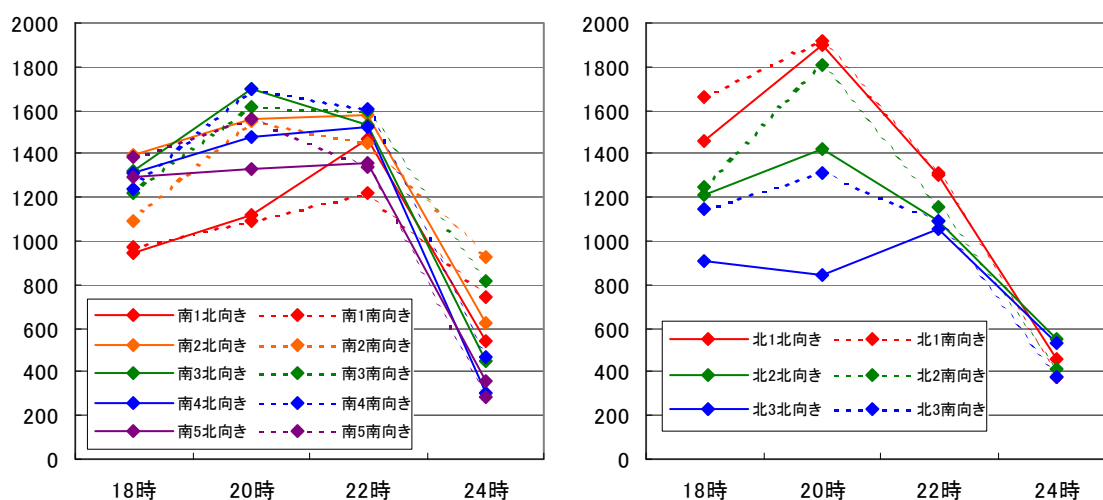


図 11 南街区・北街区の断面歩行者交通量の推移

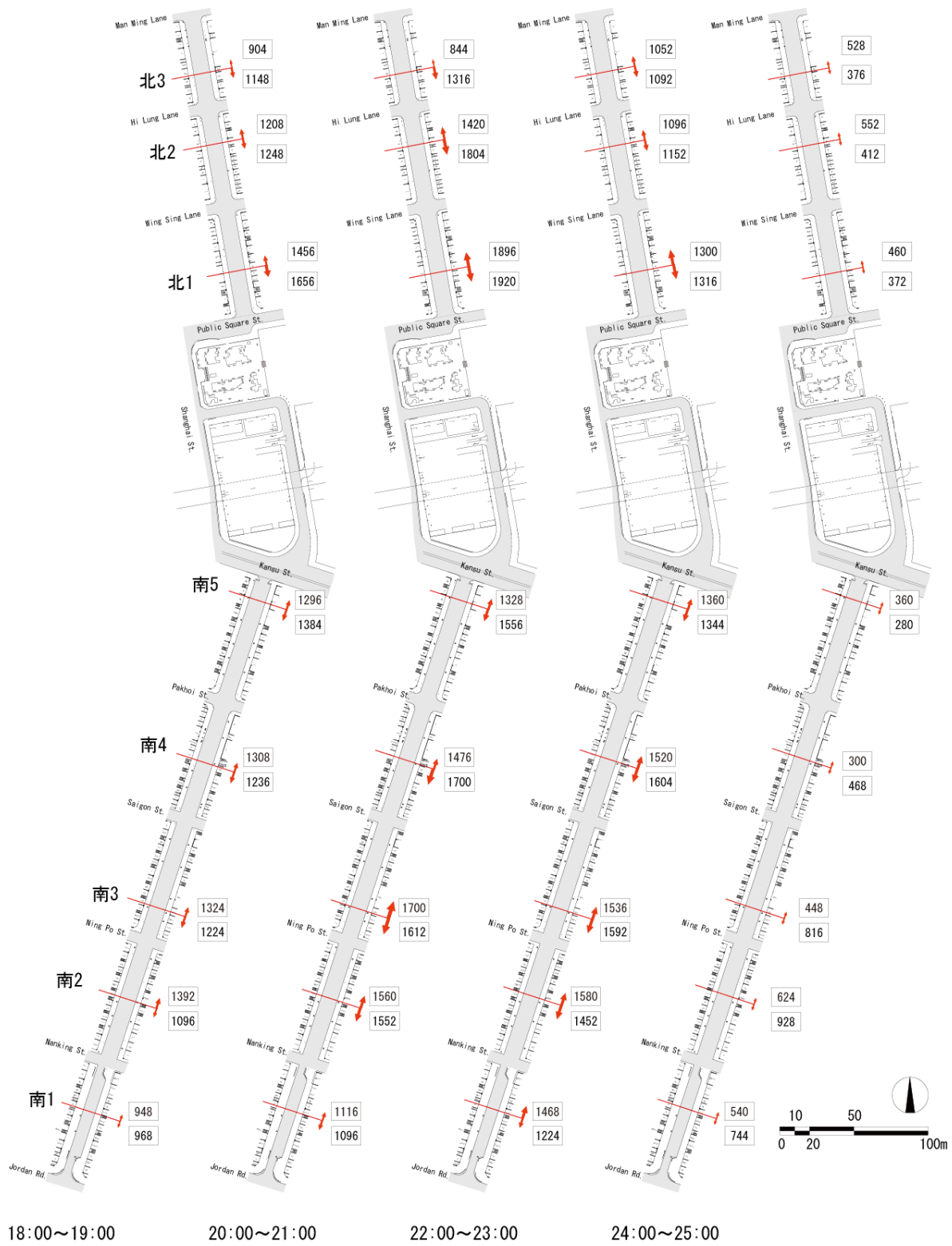


図 12 テンプルストリートの方角別断面歩行者交通量の推移

このようにテンプルストリートの歩行者の流れは18時から20時にかけて通りの端の方から流入し、20時台にピークを迎え、その後22時台にかけても頻繁に来街者が流入している。その後、駅方面へと帰宅する流れは、日付が変わる頃まで続き、深夜遅くまで多くの歩行者で賑わっている事が明らかとなった。

## 2. 歩行者の滞留からみた街路の賑わい

来街者・営業者問わず、賑わいが創出されている状態は「人の滞留」という行為が生み出すものである。「滞留が存在する空間」は、「人がそこで立ち止まり何かを行っている空間」であり、交流を生み出す可能性を備えている空間として捉えることができる。そこでここでは「人の滞留」の行為内容・密度および屋台・露店との関係に着目して、「賑わい」と「滞留行動」について考察を行う。

滞留行動は週末（土曜）と平日（月曜）の2日間、18:00、20:00、22:00、24:00の4回のビデオ撮影によって把握した。なおこの調査によって明らかとなった行為内容は以下の表1のように分類できる。

表1 テンプルストリートにおける滞留行動の種類と内容

滞留の種類	行為内容
(1)販売	屋台・露店の店番をする、客に商品を薦める、商品を陳列するなどの屋台・露店の営業に関する行為
(2)購買	屋台・露店の商品を眺める、営業者と話をする、商品を買うなどの来街者のショッピングに関係する行為
(3)飲食	来街者が大牌槽などのテーブルに座って飲食を行う行為、また、営業者が営業の合間に食事を行う行為
(4)会話	携帯電話での会話、占い待ちでイスに座っている間の会話、営業者通しの会話など、来街者・営業者問わず、他人と会話を行う行為
(5)休憩	来街者・営業者問わず休息目的としている行為
(6)ゲーム	来街者が将棋などの娯楽を楽しんでいる行為
(7)演奏・歌唱	来街者・営業者問わず、歌を歌う行為、または営業者が楽器を演奏している行為

来街者が最も多かった週末の20:00～21:00の滞留行動について分析を行った（表2）。南側街区では、屋台・露店における販売と購買の滞留が多く見られ、高い割合を示している一方で、会話や休憩などの余暇行為はほとんど見受けられなかった。南側街区では営業者と来街者の間で高いコミュニケーションが取られており、滞留密度に関しても南2街区～南5街区までの滞留密度は0.334～0.419人/m<sup>2</sup>とかなり高い数値を示していた。つまりこの区間は全体的に活動的な空間を形成していることが明らかとなった。

図書館周り及び公園周りでは、他の街区と比べて会話や休憩などの余暇行為の割合が高いのが特徴的である。また、その反面、購買の滞留が少なく滞留密度も0.226～0.238人/

m<sup>2</sup>と低いことから、比較的静的な空間であることが読み取れる。

また、北側街区では、販売、購買、飲食の滞留がそれぞれ存在しているにも関わらず、南側街区と異なり、会話などの余暇行為も比較的高い割合を示しており、様々なアクティビティが多様に混在する空間であることがわかる。また、北1街区の滞留密度は0.618人/m<sup>2</sup>と最も高くなっていた。

このように、滞留行動を分析することにより、屋台・露店が生み出す活動的な空間や図書館・公園周りなどの穏やかな空間がテンプルストリートでは共存していることが明らかとなった。また、そのことがストリート全体にリズムを与え、全体として魅力ある空間を創り出していると推察できる。

表2 各街区における滞留行為と密度

			滞留の種類 (上段:滞留人数(人)、下段:構成比(%))								滞留密度(人/m <sup>2</sup> )
			販売	購買	飲食	会話	休憩	ゲーム	演奏・歌唱	合計	
北側3番目	面積	406.8m <sup>2</sup>	22	7	115	18	3	0	0	165	0.406 (約2.5m <sup>2</sup> に1人)
	店舗数	20店舗	(13.3%)	(4.2%)	(69.7%)	(10.9%)	(1.8%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)	
北側2番目	面積	414.0m <sup>2</sup>	39	55	17	19	1	0	0	131	0.316 (約3.2m <sup>2</sup> に1人)
	店舗数	35店舗	(29.8%)	(42.0%)	(13.0%)	(14.5%)	(0.8%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)	
北側1番目	面積	485.1m <sup>2</sup>	52	133	79	30	6	0	0	300	0.618 (約1.6m <sup>2</sup> に1人)
	店舗数	56店舗	(17.3%)	(44.3%)	(26.3%)	(10.0%)	(2.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)	
公園周り	面積	786.0m <sup>2</sup>	64	69	0	29	16	0	0	178	0.226 (約4.4m <sup>2</sup> に1人)
	店舗数	64店舗	(36.0%)	(38.8%)	(0.0%)	(16.3%)	(9.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)	
図書館周り	面積	957.3m <sup>2</sup>	99	55	0	44	15	4	11	228	0.238 (約4.2m <sup>2</sup> に1人)
	店舗数	87店舗	(43.4%)	(24.1%)	(0.0%)	(19.3%)	(6.6%)	(1.8%)	(4.8%)	(100.0%)	
南側5番目	面積	587.7m <sup>2</sup>	79	119	6	29	13	0	0	246	0.419 (約2.4m <sup>2</sup> に1人)
	店舗数	58店舗	(32.1%)	(48.4%)	(2.4%)	(11.8%)	(5.3%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)	
南側4番目	面積	533.7m <sup>2</sup>	55	100	14	9	0	0	0	178	0.334 (約3.0m <sup>2</sup> に1人)
	店舗数	50店舗	(30.9%)	(56.2%)	(7.9%)	(5.1%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)	
南側3番目	面積	553.5m <sup>2</sup>	64	105	34	3	0	0	0	206	0.372 (約2.7m <sup>2</sup> に1人)
	店舗数	52店舗	(31.1%)	(51.0%)	(16.5%)	(1.5%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)	
南側2番目	面積	545.4m <sup>2</sup>	54	125	2	12	0	0	0	193	0.354 (約2.8m <sup>2</sup> に1人)
	店舗数	50店舗	(28.0%)	(64.8%)	(1.0%)	(6.2%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)	
南側1番目	面積	542.7m <sup>2</sup>	1	7	86	14	0	0	0	108	0.199 (約5.0m <sup>2</sup> に1人)
	店舗数	2店舗	(0.9%)	(6.5%)	(79.6%)	(13.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(100.0%)	

## V. 屋台・露店の管理体制からみた街路空間の秩序維持

### 1. 管理体制の概要

戦後、香港では中国本土から流入した難民の働き口として屋台・露店が激増し、そのほとんどが違法営業のものであった。そのため、屋台・露店業を除去する方針を立てていた政府だったが、1953年に屋台・露店を香港の永続的なシンボルとして位置づけ、その存在を認めるという政策へと転換した。ただし屋台・露店が都市空間に無秩序をもたらす要因として捉えられていたため、街市に收容するか、集約し固定化することで、都市空間に一定の秩序をもたらそうとしてきた。テンプルストリートもこのような政府の方針に従って、集約化されてきたもので、現在では多くの地元住民や観光客が集まる香港最大級のショッピングストリートとして機能している。

これらの屋台・露店の管理は Food and Environmental Hygiene Department (食物環境衛生署:以降FEHDと略)が行っている。FEHDは2000年1月発足の行政機関で主に香港の食料面や衛生面に関する管理を全般に行っている。その中の Environmental Hygiene Branch (環境衛生部門)が屋台・露店営業に関する業務を扱っている。

## 2. 維持・管理に関する取り組み

2007年12月にFEHDの担当者に行ったヒアリング調査<sup>(3)</sup>や、露天商へのヒアリング調査より明らかとなったFEHDの取り組みについて整理した。

### 1) ライセンスチェック

屋台・露店商の中には、ライセンスを取得している合法の営業者と取得していない非合法の営業者がいる。南側5街区ではライセンスを取得しているのに対し、北側の営業者は取得していない。ライセンスを取得している営業者はFEHDにより毎日ライセンスチェックが行われている。ライセンス料は毎年4,600HK\$（約7万円）と決められている。

### 2) 街路の洗浄

香港の街路では、1日最低1回は必ず洗浄されることが決められている。写真6に示すように、はじめにゴミが集められ、その後ホースで水を撒き、通りを洗浄している。屋台・露店のために特別に行われているわけではないが、結果的に屋台・露店から出されたゴミを清掃している。

### 3) 交通規制による歩行者天国

テンプルストリートは屋台・露店の設営開始時間として許可された時間である14時になると車両の進入が禁止される。14時を過ぎるとそれまでバスやタクシープールとして利用されていた場所に屋台・露店の骨組みが運ばれてくる。

### 4) 自警団による保安活動

FEHDは保安活動を行う自警団（Hawker Control Team）を各地区で組織している。彼らの活動には違法営業者への取り締まりや近隣住人への迷惑行為への対応などがあり、合法・違法営業者問わずに屋台・露店業を管理している。



写真5 ライセンスチェックの様子



写真6 街路の清掃の様子

## VI. おわりに

### 1. まとめ

本研究では、まず屋台・露店が集積するテンプルストリートの空間特性や利用形態について分析を行った。テンプルストリートの空間特性としては、歩道もあわせた道路幅員が約15mと比較的広幅員の道路であるが、沿道建物が高いことからアジア特有の高層建物に囲まれた高密度な街区であることが分かった。また、利用形態については屋台や露店の設営が始まる時間帯を境として全く異なっていることが確認でき、それをコントロールする手段として厳格な交通規制とFEHDによる管理体制が機能していることも明らかとなった。

次いで、沿道建物内の店舗及び屋台・露店の業種構成について分析を行った。沿道建物では飲食店の割合が高く、逆に屋台・露店では雑貨、アクセサリなどの物販系の割合が一番高かった。また、物販系でも沿道建物では地元住民向けの商品が充実しており、屋台・露店では観光客向けの品揃えが充実している。このように、沿道建物、屋台・露店それぞれがお互いの機能補完を図っており、それがテンプルストリートの魅力の一つである多様性につながっていることが明らかとなった。

さらに、屋台・露店の分布の分析より、同じ業種の店舗が集積することによって特徴的なゾーンを形成していることが分かった。そのため、来街者はテンプルストリートを歩きながら街区ごとに感じる様々なゾーンの移り変わりをダイナミックに体験し、楽しむことができる。このようなゾーン形成はテンプルストリートの魅力として来街者に支持されている。また、テンプルストリートでは狭い街路空間に数百の屋台・露店がひしめき、街路をほぼ埋め尽くすほどの高密度空間を形成している。屋台・露店のタイプも多岐にわたり、限られた空間を上手に使いこなす工夫や使いこなしが見受けられた。全体が高密度であるわけではなく、街区毎に座って飲食できる大牌槽があるなど、狭い買い物空間と休息できる大牌槽との組み合わせによって街区にメリハリを利かせている点が評価できる。このような様々な要素によって人々のコミュニケーションが誘発され、様々な滞留（アクティビティ）を呼び起こし、通り全体の多様性や魅力的な街路空間を創り上げていることが明らかとなった。

### 2. 北九州市における集客型まちづくりに向けた展望

香港・テンプルストリートでの調査・分析によって、仮設装置を活用した街路の空間特性についての様々な知見を得た。わが国では、テンプルストリートのような通年営業型の屋台街が公道上で成立する可能性は、現行法制度上の制約もあってあまり高くはないと考えられる。また、アジアのこのような屋台営業者の多くが他国や地方からの出稼ぎ労働者であることを考慮すると、日本国内において職業として成立するかについても疑問は残る。このような様々な制約条件をあえて認識した上で、北九州市の中心市街地において仮設空間を活用した集客型まちづくりを展開していく上の課題や方策について触れる。

前述したように、テンプルストリートのように特定の道路上で、仮設的であるとは言え商業空間として利用するには道路占用許可をはじめとする様々な法的制約がかかる。したがってそのような制約が少ない既存の商業施設内やアーケード商店街などの空間を活用し



て、常時ではなくても夏・冬休み期間中、あるいはお祭りやイベントにあわせた限定的な実施の可能性は考えられる。アーケードに関しては、小倉中心市街地の通りについては幅員も狭く、仮設空間を設置できるだけの空間はないが、黒崎中心市街地についてはカムズ通りや藤田商店街など、比較的縦も横も十分な空間が確保されていることから、テンプルストリートの代表的なタイプであった「パイプ+シートタイプ」の店舗（面積：約3坪）を並べる空間的な余裕は十分にあると考えられる。その上で、どのような方策が必要かを以下の3点にまとめる。

### **(1)機能補完の必要性**

1点目は、既存の小売店舗の機能を十分に把握し、バランスを考慮し、お互いに不足している機能を補完しあうことである。テンプルストリートでは沿道建物は地元住民向けの、屋台・露店は観光客向けのといったように、それぞれの店舗の特性を活かして、機能補完を図っていた。黒崎の商店街はどちらかというと市外からの来街者というよりも近隣住民の日常的な利用が圧倒的に多く、住民と観光客向けのという機能分担をする必要性は低い。もちろん機能補完というのは「住民-観光客」という構図に限ったことではなく、日用品の中でも毎日買うようなものとそうでないもの、あるいは飲食、医療、福祉といった生活サービスを屋台・露店で提供するといった機能補完も考えられる。既存店舗が取り扱っている機能や地元住民のニーズを十分に把握した上で、既存店舗に不足している機能を補っていく視点が求められる。

またテンプルストリートでは沿道の建物の一部が屋台・露店の商品倉庫や骨組みの保管場所となっているなど、限られた空間を最大限に活用していた。このような利用手法は中心市街地の最大の課題である空き店舗の利活用を模索する上でも参考となる考え方と言える。

### **(2)まち歩きと連動した業種の集積化**

2点目はある程度の業種の集約を図った上で、まち歩きと連動させたゾーニングを図っていくことである。テンプルストリートの魅力は、業種の集積によるゾーニングがなされて、街区ごとに特徴的な顔をもっていることであった。来街者は地下鉄駅を降りてから数百メートルを歩いていく中で、そのダイナミックな変化を感じることができ、それによって様々なコミュニケーションや滞留が生まれていた。黒崎中心市街地でも既存の小売店舗、サービス業、飲食店によってある程度ゾーニングが図られていることは事実である。ただしそれが人々の動きと連動していないため、来街者は特定のゾーンでのみ滞留することになり、まちの活性化には結びついていないのが現状である。長崎街道やアーケード街という線的な軸の存在は黒崎固有の財産であり、人々が歩いて移動する上での大きな道標となる可能性を秘めている。このような軸線沿いに特定の顔を持つ賑わいゾーンを配置し、連続性を高めていくことで、中心市街地の活性化にもつながっていく。その舞台装置として屋台や露店のような仮設的空間が最も効果的に寄与するものと考えられる。

### **(3)管理体制の確立**

3点目は管理体制を確立することである。テンプルストリートの屋台街が観光客のみならず地元住民から支持されているのは、営業者への毎日のライセンスチェックなど、FEHDによる適切な管理がなされているからに他ならない。日本ではこのような露店営業者

の裏側には常に暴力団などの裏社会が見え隠れしていた。安全で安心な集客エリアとして多くの来街者を集めるためには、地元の商業団体を核として、各種業界団体、自治会などによる横断的な地域運営組織を作り、その上で行政の関与も含めて、維持管理体制を確立していくことが求められる。

#### 補注

- (1) 街市は法的には公的市場（Public Market）として、位置づけられており、肉、魚を中心とした生鮮食品を扱う市場である。2～3階建ての低層のものと10階以上の高層のものもある。近年では、市場の機能だけでなく、体育館や図書館などの公共施設や行政施設と複合したものが建てられている。
- (2) 大牌槽とは戸外にテーブルを設け、食事を出す囲いのない路上飲食店を指す。席が足りなくなると道路に折りたたみ式のテーブルや椅子を並べる「簡易食堂」も大牌槽の一種である。
- (3) ヒアリング調査は Food and Environmental Hygiene Department（食物環境衛生署）、Senior Health Inspector の YAN Yung-fai 氏に対して、2007年12月3日（月）の10:00～11:00に実施した。

#### 参考文献

- 1) 神山和久、内田晃（2007）「アジアの集客都市にみる賑わい創出に寄与する要素」2006年度2006年度都市計画プロジェクト「次世代に向けた集客力のある都市づくりに関する研究」
- 2) 木下光（2003）「香港における公設市場の歴史的変遷と機能の複合化に関する研究」日本建築学会計画系論文集、第563号